

十月心光寺定例聞法会のご案内

＊期 日 平成十四年十月十六日(水曜日) 《＊毎月十六日》

＊時 間 十六日(昼席)午後一時三十分より (夜席)午後七時より

＊会 場 (昼席)心光寺本堂 (夜席)心光寺庫裏

＊講 師 大石 法夫 先生(広島市在住)

心光寺からの便り

採り入れがすっかり終わ
った田んぼの傍らでススキ
の穂が風に揺れ、周囲の野山
もこれから次第に色づいて
ゆきます。爽やかな中にも
一抹の寂しさが漂う季節と
なりました。

さて、先月号の「心光寺か
らの便り」では、大石先生が
お話の中でしばしばお使い
になる「白紙になる」という
言葉の心について尋ねさせ
ていただきました。この言葉
は大変大事なことを教えて
くださっていると思います
ので、今月も、もう一度この
言葉について尋ねさせてい
ただこうと思います。



去る八月二十八日、大石先生は大分県三光村の長仁寺様の定例聞法会におい
て、ご師匠の藤解照海先生が八十五歳になられた年(昭和五十一年)の年末に、

学苑の皆さんを相手に話された際のお話を取り上げられました。その時の藤解先生のお話については、ご著書の中でも次のように書いておられます。

「今日は十二月三十日です。今からちょうど十二年前（昭和五十一年）の今日、新館にお師匠様が出てこられてお話されました。

『この一年間いろいろと苦勞なこともあったが、それを超えて来られたのは仏様のおかげであつたと、それを喜ばせて貰いましょうで。これが大事なのですよ』

『どんな苦難が来てもそれを受けてゆき、突っぱなしてゆける力を貰うたからこそ有難いのです。これが名号不思議の力というものです』

『どうにもなるものではないということが、わしの八十五年間の結論じや。指のないおじいさんを二年七ヶ月世話したが、わしが貰った菩提心を引き出す役目をしてくれた仏様でありました。』

『生まれてよかったですか』十九頁

この時藤解先生は、「どんな苦難が来てもそれを受けてゆき、突っぱなしてゆける力」を与えてくれるのが名号不思議の力だとおっしゃっています。ところが一方では、「どうにもなるものではないということが、わしの八十五年間の結論じや。」ともおっしゃっています。常識的に考えれば、この二つの言葉は矛盾しているように聞こえます。実際大石先生も、その当時はそんなふう感じられたとおっしゃいました。

しかし大石先生はそれに続いてすぐ、次のように話されました。

「今はねえ、地獄一定。どの瞬間もどうにもならない。それが本当。昔は良かったが、今はダメじゃ。（あるいは反対に）今はいいが昔はダメじゃつたと、そういうことはありません。どの瞬間も、良かったいうても悪かったいうても、業の中なんです。それを知らせてもらったら、終にね、（中略）光があらわれてさつと闇が消えるんです。（中略）今日もこうして倒れんこうに（倒れずに）進んでいけるのは、『地獄は一定住みかぞかし』『歎異抄』。瞬間瞬

間にどうにもならぬ。これを知らせてもらったからです。」

(平成一四年八月二九日、長仁寺定例聞法会)

あるいは、このご法話の前日にも、次のように話してください。

「ほんとはね、どんな瞬間も地獄じごく一定じていなんよ。絶対絶命ぜったいぜつめいの所におるんよ。それを知らせてくれるのが教え。今私はねえ、どんな瞬間も自力じりきの力ではどうにもならぬと。それを知らせてもらう瞬間しゅんかんに念仏ねんぶつが出てくださる。念仏の中に、五劫思惟ごこくしゆいのご本願ほんがんが、「いつも待っておったんぞ」とあらわれて、いつも(自分の思いを)破やぶってね、本願ほんがんが出てくださるんですよ。人間は光あかりに遇あたら必ずね、未来の幸せを願ねがわんこうに(願ねがわずに)、過去の業ごうに引きずられんこうに(引きずられずに)、『無始むし已来いらいつくりとつくる悪業あくごう煩惱ぼんのうを、のころところもなく、願力がんりき不思議ふしぎを以もつつて消滅しょうめつする』(『御文おふみ』五帖目第五通)。これを正定聚不退転しょうじやうじゆふたいてんといまして、新あらたしい道みちに出発しゅつぱつできるんですよ。これがあるから続つづくんです。」

(平成一四年八月二八日、長仁寺定例聞法会)

このようにお話しくださっています。

この中で、「どんな瞬間も自力じりきの力ではどうにもならぬと。それを知らせてもらう瞬間に念仏ねんぶつが出てくださる。」とおっしゃっている所が重要です。もの心ついて以来頼りにしてきた自力じりきの執心しやくしんの破綻はたんという出来事が、ここに語られていると思います。

また「知らせてもらう」とおっしゃっている点も重要です。もしそれを自分の力で知るのであれば、いわゆる絶望ぜつぼうと変わりありません。自分で「どうにもならぬ」と言う場合は、ほんとに「どうにもならぬ」しかないのです。闇やみが消えるどころか、闇やみしかありません。「どうにもならぬ」闇やみをかかえたまま、そこへうづくまる他ほかありません。それは人生の終わりと云ってもいい状態です。進むべき道みちが完全にふさがれてしまった状態です。

ところが同じ「どうにもならぬ」でも、それを「知らせてもらう」という場合は、「知らせてくれたもの」が存在そんざいします。従したがって「どうにもならぬ」となっ



熱心に大石先生のご法話に耳を傾けるお参りの皆様方
(平成14年6月16日、心光寺定例聞法会にて)

たら、自分には道がないことがはっきりしたのだから、知らせてくれたもの、すなわち光に依るほかありません。つまりそこに進むべき道が開かれるわけです。道が決まるのです。

そういうふうと同じ「どうにもならぬ」でも、自分で知る場合と知らせてもらう場合とでは、ほんのちよつとの違いにみえて、結果的にそこに天と地の差が生じることになります。

ノートを開いておりましたら、大石先生がその辺の消息を語ってくださいって
いる次のようなお言葉に出会いました。

『私には何もできませんから、きえ帰依いたします』となったら、その言葉は光から出たものです。自分は煩惱ぼんのう具足の凡夫と知らされたら、その姿は光の中におった。光にあ遇わにや、それが見えない。自分が『あそう思うて…』ではだめです。『あ思うて』だったら、あ思うておる〈我〉が残りますから…。

光にあ遇うたら、絶望。もう自分で生きていけませんから『お願いします』となる。『あこころをひとつにして、阿弥陀仏をふかくたのみまいらせて、さらに余のかたへこころをふらず、一心一向に、仏たすけたまえともうさん衆生をば、たとい罪業ざいごう深重なりとも、かならず弥陀如来はすくいますすべし。』という『あ御文章』(五帖目第一通)ひとつが本当にわかるようになるんですよ。」

(平成一三年一二月一六日、心光寺定

例聞法会)

このお話の中で、『あ思うて』だ

つたら、思うておる〈我〉が残りますから」とおっしゃった〈我〉が、一切の迷いの元凶げんきょうです。この〈我〉が「どうにもなるものではない」と思うのであれば、道は閉ざとされます。

これに対して大石先生は、「光に遇あわにや、それが見えない」とおっしゃっています。つまり「どうにもなるものではない」というのは、光に遇あうて見えた世界です。続けて、「光に遇あうたら、絶望。もう自分で生きていけませんから』お願いします』となる」とおっしゃっています。

すなわちそこで『そう思うて…』という〈我〉に死んで、新しい我よみがえに蘇よみがえる。そういう私の転換が起こるのです。これが「白紙になる」という比喩ひよ的表現の内容ではないかと思えます。

先日、長崎県大島町の帰命寺馬込教場きみょうという所で地道に教化活動きふくわつを続けられる高岡願生たかおかさんから次のようなお便りをいただきました。

「拝復。いつも『心光寺からの便り』をお送りいただき有難うございます。先月はお盆過ぎてから体調を崩くずしてしまい、ご返信できませんでした。先月号で大石先生の求道のすさまじさを知り、改めて『生まれてよかったですか』を読み直しました。松原祐善先生ゆうぜんもすさまじい求道でしたが、親鸞聖人しんらんしょうにんの求道きうだうのことが実感されました。

今月号で『南無のこころ』のことがありましたが、実は私も三十歳頃、専修学院で児玉（暁洋）先生に『帰命きみょうのこころがありませんがどうしてでしょうか？』とお尋ねしたことがあります。その時に児玉先生は、『他に頼むところがないか？』とお尋ねになり、私が「有ります」と答えると、そのことが本当に如来きみょうに帰命きみょうするところを失っているというような意味のことをお答えになりました。（以下略）」

ここに高岡さんが書いてくださった児玉先生とのやりとりは、先ほどの私の転換ということの核心にふれる大変面白い問答だと思えました。私はこの問答

を読みながら、こんなことを思いました。

私どもが何を抛り所として生きるかというその抛り所の場所は、自分を頼みにする心と帰命の心のいずれか一つしか置けない場所である。そこは広さが限られていて、一方が入れば、他方は押し出される他ない。そして瞬時も空になることはない。つまり常時そのいずれかが、必ずその場所を占領している。ちようどそんな限られた容れ物のようなものではなからうかと。

他に頼む心があるということは、自分を頼みにする心が今その場所を占領している。その上でいくら帰命の心を持ってこようとしても、それは無理な話だと、そう児玉先生はおっしゃったのではないかと思います。

「白紙になる」ということは、今のたとえでいうとどうなるでしょうか。それは、何を抛り所にするかというその場所を、今まで自分を頼みにする心がずっと占領し続けてきた。きのう今日の話ではなく、無始の昔から占領し続けてきた。いまだかつてその場所を明け渡したことは一度たりともなかった。しかし如来の私に対する深い矜哀と善知識のたゆまざるお育てによって、今はじめて南無の心はその場所に入り込んで来てくださった。そのことによって自分を頼みにする心がそこから押し出されて、ついにその場所を明け渡した。そのような南無の心の喜びの表現、勝ちどきの声、ということになるのではないでしようか。

つまり「白紙になる」とは、単に空っぽになるということではなく、南無の心に生きる。そういう新しい我を賜る。そのような新しい出発点に立つ。最初に挙げた大石先生のお言葉に帰りますと、「これを正定聚不退転といまして、新しい道に出発できるんですよ。これがあるから続くんですよ」ということになるのではないかと思います。

私は前述のたとえを書きながら、ひとつのことに気付かされました。それは一心帰命の信心の大事さを急ぐあまり、私はその容れ物の中に、一心帰命の心なるものを入れよう入れようとしてきたのではなかったかということです。実はそれは逆でした。その場所を空ければ、入れ替わりに如来の一心帰命の心が入って来るのです。それなのに私のやってきたことは、そこから出ることで

なくて、そこに何かを入れようとはかりしてきたのでした。そこに方向の大きな間違いがあったのです。「白紙になる」ということの意味をこのことから教えられます。

さて以下「白紙になる」ということについて、拙い断章をもう少しばかりつけ加え、ひとまずこのテーマを閉じたいと思います。



◇「白紙になる」ということは、そこに出発点を賜るといふことです。娑婆の問題の中で、行き詰まって、破綻した。これで私の人生も終わりだと。ところがそのような絶望。人生の終着駅が、実は私の本当の出発点だということなのです。

人生のどんな場面、どんな境遇においても、この「白紙になる」という世界をいただければ、そこに出発点を賜る。どのような場所においても、そこを出発点として新たに立ち上がっていける。そういう世界をそこに賜るのです。

◇インドの天親菩薩は、八百年前のお釈迦様をはるかに念じて、「世尊よ、私は一心に尽十方無碍光如来に帰命して、どこどこまでも、一切の命あるものと共に救われる国（安楽国）を願って生きていきます」と表白しました。

尽十方無碍光如来とは、あらゆる所、あらゆるものに妨げられない光の如来ということなのです。いかなる状況、いかなる境遇にも妨げられない光の如来ということなのです。つまり私たちがもうこれで終わりだと思ふような人生の問題にぶつかっている時でも、それに妨げられない。人生のいかなる問題も、これを妨げることとはできないということなのです。そのような光に出遭ったということなのです。そのような無碍の光に出遭う瞬間を、別な言葉でいえば「白紙になる」というのだと思います。

光というのは、私たちが撮取して捨てない無量の命のことです。実際命というものは、いかなる状況においても平等に生きられているものです。このような

状況の中では、生きるのは「ご免だとか、手かげんしておこうとか、そんな思惑は一切ありません。私の思いがただそう思っているだけです。周り」と比べて、昔とくらべたりして、こんな境遇はまっぴらだ。ご免こうむると言って、自ら不自由な世界を作り上げているだけです。

しかし命そのものは、私がどのように思っておろうと、そういうことには一切妨げられず、虚心平気に生きようとしています。その命は「白紙」です。いかなる私の思いにも汚されていません。純白です。

そのような命を、私たちは皆例外なく平等に与えられて、今生きているのです。そこには貧富の差も、能力の差も、善悪の差も、年齢の差も、男女の差も、人種の差も一切ありません。

親鸞聖人のお言葉に、「弥陀の本願には老、少、善、悪の人をえらばれず」『歎異抄』第一章』と云われているとおりです。

◇先月号に書いたように、「白紙になる」ということがなぜ福音として感じられるかといえ、その言葉において、重荷にあえいでいるその重荷を、今やっと下ろすことができたという、ちょうどそんな感じがするからです。そこに「他力」というものの力を感じます。その力は、決して私の中から出てきたものではありません。何か私を超えた偉大なもの、そういう力に自分の重荷を下ろして委ねる。そんな感じですよ。

親鸞聖人のお言葉に、

「しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらざ、念仏にまさるべき善なきゆえに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なき

がゆえに」

『歎異抄』第一章

というものがあります。非常に力強いお言葉ですが、中でも「悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえに」の箇所、何か理屈を超えた不思議な力強さを感じます。

善を求めるあまり、自分の悪を恐れる心が私どもを苦しめることがあります。その心を下ろして弥陀の本願に委ねた。そして「白紙」になった。そこに、「自らの存在がいかなるものであろうとそこに立つ」という力強い世界を賜ります。善というよりもむしろ悪というところに、私の存在が逃げ隠れできずあらわにされますが、そこにおいてこそ、「白紙」にさせていただく喜びをより鮮明に感じさせられます。善を欲し悪を恐れる道徳的な心、廃悪修善の心、罪福心、上昇志向。そういった自力の心がそこにおいて見事に破られることを感じるのです。その自力の心が破れた端的の言葉が「白紙になる」ではないかと思えます。

◇清沢満之先生の「落在」という言葉にも、同じ世界を感じます。これは「落ちて在る」という語句の通り、到達した世界ではなく、落ちてこそ開かれる平安の世界を表しています。

私はもの心ついて以来、上を目指して、登ろう登ろうとしてきました。目指す地点に行けば、そこに幸せが待っているとひたすら夢見て…。

しかし人生の様々な出来事の中で、そのような上昇志向は一つ一つ打ち砕かれていきます。そしてついに破綻して、手がはずされる時が来ます。宿業の大地にたたきつけられるのです。しかしその地獄一定の大地こそは、如来の南無の心に支えられた最も確かな大地だったのです。

それは我と人との間に差をつけ、人に勝つことによってもたらされる幸福ではありません。万人に共通に流れる命に乗託した安らかさです。そこに法蔵菩薩の志願を賜り、そこに私の生涯の全てをささげて悔いがないという、そういう新しい道の出発点を賜るのです。そのような新しい命の出発点に立った歓喜の表現が、「世尊よ、私は一心に尽十方無碍光如来に帰命して、どこどこいまでも、一切の命あるものと共に救われる国(安楽国)を願って生きていきます」という天親菩薩の表白となっている。そう私はいただいています。

大石先生は「白紙になる」という一語において、そのような限りなく豊かな世界を私に告げ知らせてくださっておられます。大石先生がご法話の中でしば

しばお使いになるこの一語から、そんなことを教えられた次第です。

◇

◇

◇

◇

◇

最後になりましたが、今月二十六日から二十八日にかけて、門徒総代長の杉田百隆さんももたかといっしょに本山（東本願寺）に上山じょうざんして、住職を拝命し、住職修習の研修を受けてきます。このことについてはまた機会を改めてご報告させていただきます。

朝夕、急に冷えこむようになりました。どうぞご自愛の程お念じ申しあげます。

南無阿弥陀仏

宮岳文隆拜

平成十四年十月十日

摄取山心光寺